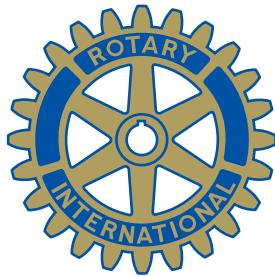


新会員のためのロータリー情報

ロータリーの目的と 奉仕の理念



三島西ロータリークラブ

2021~2022年度

ロータリー情報委員会

ロータリーの目的と奉仕の理念

1. ロータリーの目的

ロータリーの目的は「奉仕の理念」を奨励し育むこと

ロータリーの目的は、国際ロータリー一定款第4条・標準ロータリークラブ定款第5条の「ロータリーの目的」に示されています。

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

「ロータリーの目的」は、原文(英語)では“The Object of Rotary”です。“Object”は単数で示されていますので、目的が4つあるということではなく、最初の2行が(前文ではなく)本文(「目的」を示す)で、以下の4項は本文の具体的説明ということになります。

したがって、ロータリーの目的は、要約すれば「奉仕の理念」を奨励し育むことです。

それでは、「奉仕の理念」とは何でしょうか。

2. ロータリーの理念

「奉仕の理念」(「奉仕の理想」とは何か)

「奉仕の理念」(「奉仕の理想」)は、“The Ideal of Service”的訳語です。“Ideal”を「理想」、“Service”を「奉仕」と直訳することで、原語のニュアンスが伝わらないと指摘する識者もいて、「サービス理念」とか「サービス哲学」という訳もあります。

従来“The Ideal of Service”的意味を解説した文献は、『公式名簿』巻末にチェスレー・ペリーが記した「ロータリーカラム」の1節だけだとされていました。

全世界のロータリークラブは一つの基本理念—「奉仕の理想」を持っている。それは他人のことを思いやり、

他人のために尽くすことである。

しかし、1931 年に RI が発行した「目標設定計画」(The Aims and Objects Plan)というパンフレットの中では、“The Ideal of Service”的意味を以下の4つの言葉で示しています。

一つめは、ロータリーの第1モットーである「超我の奉仕」。二つめは、同じく第2モットーである「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」。三つめは、「他者への思いやり」。これは上記のチェスレー・ペリーの言葉と同じです。四つめは、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」

という黄金律(マタイによる福音書 7-12)。当時のロータリアンが“The Ideal of Service”に託した意味は、以上4つの言葉が意味するものを包含していると考えられます。

アーサー・F・シェルドンの「ロータリーの哲学」(1921 年)

ロータリー独自の「奉仕」“Service”概念を確立したのが、「ロータリーの学者」といわれ、ロータリーの第 2 モットー「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」の作者である、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

シェルドンは 1908 年にシカゴ・ロータリークラブに入会し、ロータリー活動や理念の哲学的根拠を提示した人です。シェルドンは、1921 年「ロータリーの哲学」という論文の中で、ロータリーの「サービス」の意義を詳しく論じています。

シェルドンはロータリーの哲学は、「サービスの哲学である」と主張します。

そして、ロータリーモットー “Service Above Self – He Profits Most Who Serves Best” の中の、“Service” と “Self” と “Profits” の関係を明らか にすることでロータリーの哲学を明確にしようとした。(ここでは、二つのモットーが一体化して示されていること(モットー“motto”は単数)に注目すべき)

Service(奉仕)と Profit(利益)の三角形

シェルドンは、“Service”と“Profit”とは、原因と結果の関係にある、と言います。“Service”があるから“Profit”が生じる。“Service”が先で、“Profit”はその結果である、と言うのです。原因としての“Service”は、「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」で構成されており、一方、結果としての“Profit”は、仲間からの尊敬や自尊心の満足といった精神的な充実感と、物質的・金銭的な利益の両面を意味している。

シェルドンの“He Profits Most Who Serves Best”という言葉は、金銭的な利益を求める功利主義と誤解されることがあるのですが、“Profit”が単に「金銭的な利益」を指しているのではないこと、利益は目的ではなく結果であることがこの「奉仕と利益の三角形」の解説を読むとよくわかります。

Service(奉仕)における「正しい質」「正しい量」「正しい行動様式」とは

それでは、シェルドンの言う「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」とは、具体的には何を指しているのでしょうか。それは、

- ・ 高い品質、適正な価格・ 豊富な品揃え・ 経営者・従業員の適切な接客態度・ 公正な広告・ 豊富な商品知識、高度な専門知識・ 十分なアフター・サービス

という、現代企業が顧客の信頼を得るために必須の「サービス」と異なりません。

ロータリーにおける Service(奉仕) の現代的意義

1927 年、「四大奉仕」の枠組みが確立し、以来「職業奉仕委員会」と呼ばれるようになった前身の委員会は、

“Business Method Committee”(アーサー・シェルトンが初代委員長)という名称でした。当時、ロータリーにおいて「サービス」という言葉は、正しいビジネスの方法を示す中核概念だったのです。

「サービス」という言葉は、現代日本では「値引き」「おまけ」「無料」などの軽い意味で使われることが多く、また、「商品」(モノ)に対して人的労力の提供を「サービス」と呼んでいます。しかし、ロータリーのいう「サービス」にはもっと深い意味が込められています。サービスが正しいビジネスの方法を意味していたシェルトンの時代からロータリーの活動が広範囲に広がった 100 年後の現代、ロータリーにおいては、「サービス」を、その最も広い意味、そして本質的な意味で使うようになっています。すなわち、

「社会に役立つ価値を提供すること」「世のため人のために尽くすこと」

ロータリーは、事業および専門職務の代表者の集まりですから、その「サービス」は先ず自らの職業で発揮されることになります。それを「職業奉仕」と呼びます。自らの職業のサービスのレベルを高め、社会に貢献できるよう努めることが、ロータリアンの最優先課題といつてもよいでしょう。

*朝日・読売・日経の各新聞が、米国のオバマ新大統領の就任演説(2009 年 1 月 20 日)の日英対訳を掲載していました。その演説の中に 3か所、Service という言葉が出てきます。現代の米国での Service という語の使われ方がよくわかるのでご紹介します。

一つは狭義のサービス。「商品・サービス」(goods and services)と「商品」という言葉と対にして、使われています。日本語訳でも訳しようがないので、「サービス」とカタカナ表記しています。

二つ目は、演説冒頭で、ブッシュ大統領に敬意を表して“I thank President Bush for his service to our nation” 「私はブッシュ大統領のわが国への奉仕に感謝する」。朝日新聞はここを奉仕と訳さず、「わが国に対する貢献」としています。英語の Service には、「奉仕」という日本語では伝わらない、「貢献」や「献身」の意味が含まれていることがわかります。

三つ目は、演説の後半、我々は過去のアメリカをつくり守ってきた英雄と同じように“the spirit of service” 「奉仕の精神」をもつべきだ、と訴えています。そしてその「奉仕の精神」とは、「自分自身よりも大きな何かの中に 進んで意味を見出す意思」と言い換えています。

ロータリーの広義の Service 「世のため人のために尽くす」と重なっていると考えられます。

ロータリーモットー(標語)

ロータリーには二つのモットー(標語)があります。第 1 モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第 2 モットーが、アーサー・シェルトンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」 “He Profits Most Who Serves Best” です。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第 1 モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉は、これを「サービス第一、自己第二」とか「自己に先立つサービス」と訳しました。「超我の奉仕」より原義を伝えています。第 2 モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

前掲のシェルトンの論文(『ロータリーの哲学』)ではこの二つのモットーは、一体化して提示され解説されて

いました。ロータリーの奉仕の哲学を端的に表現している「決議23-34」の第1条でも二つのモットーがキーワードとして並んで示されています。二つのモットーを一つの主張として捉えると、ロータリーモットーの真意は次のようになると考えられます。

サービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の金銭的な利益と、大きな精神的満足が得られる。

ここで主張されている思想こそ、「ロータリーの奉仕の理念(奉仕の理想)」の核心です。そして、注意しなければならないのは、これは決して利益を求めて奉仕するという「功利主義」的な思想ではなく、他者のために尽くすことが自らの幸せ(喜び)であるという、他者に奉仕すること自体を目的とする「利他主義」の思想だということです。利益はあくまで結果です。

「奉仕の理念」は自分にとって何を意味するか？

ロータリーの目的は、次のように言い換えることができます。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を広め、その価値を高めてゆくこと。そして、ロータリアンとは、個人生活・職業生活・社会生活等、人生のすべての面で、「奉仕の理念」の研鑽と実践を行う人である、言うことができます。

「奉仕の理念」の意味を解説した前掲の『目標設定計画』(1931)の中で、「奉仕の理念(奉仕の理想)」は自分にとって何を意味するか？という問い合わせ私たちに投げかけられています。

「職業奉仕も含めて「奉仕の理念」の解釈は意図的にロータリアン各自およびロータリアンのグループに任せている。／その適用は広範で多様な状況、問題、可能性に対応して実行されなければならない／ロータリアン個人が“私の職業を通じて「奉仕の理念」を適用するとは自分にとって何を意味するのか？”という問い合わせ自ら答えることができなくてはならない。」

国際ロータリー2840地区PDG・前橋RC 本田博己「ロータリーの基本」より